大阪文化財センター調査報告ＸＸＶ

南河内道路に関する第３回埋蔵文化財予察調査報告書

昭和53年２月

財団法人　大阪文化財センター

南河内道路に関する第３回埋蔵文化財予察調査報告書　(セ)
(IDなし)

例　言

1)　本冊子は財団法人大阪文化財センターが、建設省近畿地方建設局浪速国道工事事務所の委託を受けて実施した、南河内道路に関する第3回埋蔵文化財予察調査の分布調査報告書である。

2)　調査に要した費用は、全て建設省近畿地方建設局浪速国道工事事務所が負担した。

3)　調査は、財団法人大阪文化財センター業務課調査室が担当し、1977年12月5日より同年12月27日迄の間、現地における調査を実施した。

4)　現地での調査には、調査室長中西靖人の指示のもとに、調査主任、国乗和雄、調査員、尾谷雅彦、同、菊竹信幸が担当した。

　また、採集した遺物の整理作業は、当センターの福岡澄男、妹尾直子、畑暢子の積極的な援助を得た。

5)　本冊子の執筆は、中西靖人、国乗和雄が分担した。

6)　調査を行うに際しては、建設省近畿地方建設局浪速国道工事事務所の関係各位に援助を受けた。記して感謝する。

7)　図版五、六にプロットした遺跡は、周知、新規発見を含むが、調査対象範囲外で周知のものは古市近辺、対象範囲近辺に所在するものに限った。

8)　調査におけるカラースライド、採集遺物等は事務局に保管しており、広く利用されることを希望する。

目　次

例　言

〔Ⅰ〕調査に至る経過……1

〔Ⅱ〕調査方法……1

〔Ⅲ〕調査の結果……2

〔Ⅳ〕まとめ……9

挿図目次

第1図　調査地付近図

図版目次

図版一　1～14区　主要遺跡

図版二　15～21区　主要遺跡

図版三　採集遺物

図版四　採集遺物実測図

図版五　遺跡及び散布地分布図（北域）

図版六　遺跡及び散布地分布図（南域）

第１図　調査地付近図

「本書に掲載した図は、建設省国土地理院の承認を得て同院発行の５万分の１地形図を複製したものである。（承認番号）昭53近複、第34号」

〔Ⅰ〕調査に至る経過

建設省近畿地方建設局は、南河内道路の路線決定の参考とするため、昭和46年度及び同49年度に今回の調査地域の南～南西地域で、財団法人元興寺仏教民俗資料研究所に委託して埋蔵文化財の分布調査及び範囲確認調査を実施した。さらに昭和50年度には、財団法人大阪文化財センターに委託して２回目の分布調査を実施し、その結果さらに今回の３回目の調査を実施することとし、建設省近畿地方建設局と財団法人大阪文化財センターは、昭和52年12月５日付で委託契約を締結し、昭和52年12月５日より同月27日まで現地での調査を実施し、翌年２月28日までの間、整理業務を行った。

〔Ⅱ〕調査方法

建設省近畿地方建設局が提示した調査範囲は第１図に示すとおり、西は大阪府羽曳野市誉田から、東は近鉄南大阪線上ノ太子駅の東側丘陵に及び、東西約４㎞、南北約2.5㎞の広大な面積であるため、川及び谷筋を利用して便宜的に21地区に分割し、各地区を綿密に踏査することにした。また調査範囲内から調査範囲外へ拡大する散布地や、調査範囲に近接する古墳等についても実地踏査を確実に実施し、位置の再確認や実態の把握をすることとした。さらに調査範囲の中に数多く含まれる周知の遺跡についても、再度位置及び規模等必要な調査を実施した。

調査は全べて踏査するものとし、地表面の観察で可能な限りの結論を出し得る様心がけ、遺物採集地や遺跡(特に古墳関係)は、一層詳細な調査を実施した。

尚、遺物採集地点や古墳確認地点は現地で1/2500地形図に記入し、その状態をフィールドノートに記すとともに、必要なものについては写真撮影をした。

現地調査終了後、それらの資料を基本的に整理し、時期的、地域的な判別を行った。

〔Ⅲ〕調査の結果

調査結果の要約を若干述べると、石川左岸にあたる調査範囲北西端の1・2区では、古代～近世にかけての遺物が散布し、右岸の3区では円明遺跡の北西で奈良時代の遺物を若干採集した。次に山間部北西端の5・6・7区では大池の周辺で弥生時代後期の遺物がみられ、4区から調査範囲南東端の21区に到る地域では、誉田山古墳群、飛鳥千塚古墳群など、古墳時代の遺跡、遺物等が存在した。また主として16～21区にかけての二上山北西麓の地域では、旧石器～縄文時代の遺物（サヌカイト剥片等）を数多く採集した。なお西名阪自動車道路沿いの4・6・10区では、相当広範囲にわたって玉手山、誉田山等の古墳群の消滅を確認した。

1・2区　羽曳野市誉田・碓井

この地域は、大和川の一支流である石川と洪積台地の羽曳野丘陵に挟まれており、近辺の台地上には北から応神陵、茶山遺跡、誉田八幡神宮寺跡、上堂遺跡、西琳寺跡というように、バラエティーに富んだ数多くの文化財が所在する。

遺物は弥生～近世にかけての多様なものが田畑、無花果園のほぼ全域にわたって散布しており、(図版一·1) その種類は投弾（？）、須恵器、土師器、瓦器、陶器などである。これらの遺物は、比較的小片で摩滅を受け、かつ表土に砂礫が多くみられることから、東端を北流する石川の氾濫、台地からの流入などが考えられるが、遺物の散布を認めたことは、散布地の条件が整っているといえよう。

3・4区　柏原市円明・玉手、羽曳野市駒ケ谷

調査地の西は石川、東は府道水分駒ケ谷柏原線、北は西名阪自動車道路に挟まれており、3区は平地、4区は玉手山丘陵から連なる山地である。

3区の西域には田畑が残存するが、東域では盛土がなされており、この造成地の南半分では「郡田」と記された墨書土器の出土をみた、奈良時代の安宿郡衙とされる円明遺跡及び、同時期に存在したと考えられる、安宿寺推定地の円

明廃寺跡が埋没している。今回の調査では、円明遺跡の北西の地で上記の時期にほぼ等しいとみられる須恵器、土師器を採集し、それらの結果より周知の円明遺跡は、北西域にも広がることが考えられる。

4区は、過去において玉手山古墳群に属した前方後円墳の玉手山12号古墳、円墳の玉手山円明2号・4号古墳が存在したが、現在は大阪中小企業団地の造成によって消滅しており、また調査範囲外ではあるが、これらの北隣りの西名阪自動車道路内には竪穴式石室をもった、北玉山（玉手山11号）古墳が存在した。分布調査結果は、範囲外に現存する玉手山13号古墳より東100mのブドウ園で若干の須恵器、土師器を採集したが、この屋根上の採集（4－1）地点はマウンド状をなし、古墳である可能性は高いといえる。

5・6・7・8区　羽曳野市駒ケ谷・五十村（いそむら）・誉田

この4区画は、西は府道水分駒ケ谷柏原線、東は調査範囲内の最高峰である鉢伏山塊との谷に挟まれた比較的起伏の少ないなだらかな山丘が横たわっていて、中央部には大池を有する谷が南北に走り、その殆んどがブドウ園として開拓されている。(図版一・2)

5区は弥生時代後期の遺跡として知られている五十村遺跡が尾根上に存在しているが、今回の調査でも、周知の遺跡範囲の北域で、壺、高坏など弥生時代後器の土器細片多数と陶器を採集した。(図版三·1.7) また弥生式土器採集地点とほぼ重複して、須恵器が散布しており、古墳等の存在したことが、うかがわれた。

6区の南域においては、なだらかな自然地形が残存するが、3分の2はすでに削平されていた。「大阪府文化財分布図」には大池の東に隣接する尾根に、5基の古墳がプロットされているが、東西端の2基はすでに土取りによって消滅しており、残りの3基が存在する(図版一·3)。しかしこの斜面においては、マウンド状を呈する箇所を新たに1ケ所で確認した。また7区との境付近の西側斜面では、弥生時代後期の土器細片を多数採集した。

7区・8区は5・6区からの2つの尾根がひとつになり、地形、土地利用状

態とも5区と同様である。

7区の大池近辺では、6区の南端で採集したように、弥生時代後期の土器細片を採集し、大池の谷をはさんで、弥生時代の住居が存在したことがうかがわれる。

また、7・8区では、そのなだらかな地形を利用して造営されたと考えられる古墳状の地形を10ケ所、須恵器、土師器などの散布地を4ケ所にわたって確認できた。

以上の5・6・7・8区では、その地形から推すと、他にも古墳が造営されてきたであろうと思われるが、開墾によって、消滅したものは多数にのぼると考えられる。

9・10区　柏原市国分(こくぶ)・旭(あさひ)ケ丘(がおか)、羽曳野市誉田・駒ケ谷

西区は鉢伏山北麓の舌状の尾根で、双方の尾根とも東斜面では傾斜がきつく西がゆるくなっており、尾根上および西側斜面には多数の円墳が存在し、誉田山古墳群とよばれている地域である。

9区の遺跡は、「大阪府文化財分布図」には、東斜面の1基を除いて、16基が尾根の西斜面にまんべんなく認められたが、その他に6ケ所で古墳の可能性のある地形を発見した。なおこの付近では、須恵器の破片を10数片採集したが、それらは6世紀末～7世紀に比定されるものである。(図版三-3·5·6)

10区は「大阪府文化財分布図」によれば、範囲外も含めて32基の古墳が存在していたが、柏原市と羽曳野市との市境付近から柏原市側は大きく土取りがなされており、14基の古墳が消滅していた。(図版一·4.5) また、羽曳野市域では周知の5基と共に古墳の可能性がある地形を3ケ所で確認した。

11区　羽曳野市駒ケ谷・誉田

9区にあたる誉田山古墳群と同一の尾根上にあって、南に片寄って分布する5基の古墳は周知の遺跡となっている。(図版一·6)

この尾根は中央付近が自然林で周囲はブドウ園になっているが、今回の調査では、北～北西にかけての斜面で、9ケ所のマウンド状地形が確かめられ、マ

ウンド付近では、6世紀後半～7世紀にかかる須恵器を採集した。(図版三・4.9)

これらの土器は、9区の誉田山古墳群のものと時期が合致し、同一尾根上に所在することなどから推して、一連の遺跡と考えることができよう。

12・13区　羽曳野市誉田

両地区は鉢伏山の北斜面にあたり、北端と西端でのみブドウ園が広がっているが、他は自然林や廃園となっている。この地区には、石室石材に利用できそうな岩石が、所々で露頭しているが、マウンド様の地形は認められず、また遺物もみられなかった。

14区　羽曳野市飛鳥(あすか)・駒ケ谷・誉田

鉢伏山より西に延びる東西の尾根で、鉢伏山頂付近は自然林、尾根はブドウ園になっている。鉢伏山頂より、南々西約150mの尾根上には、麓の駒ケ谷、上の太子に多い姓の〝真銅〟と同姓である、真銅氏之墳と彫られた石柱がたっており、(図版一・7) それには弘治3年 (1557) 8月8日と記されていた。

また、その西尾根には、横口式石槨を内部主体とする、古墳時代後期の鉢伏山西峰古墳 (図版一・8) をはじめ、計5基の古墳が周知されているが、今回の調査では、新たに4ケ所で、マウンド状の地形を認めた。以上古墳関係について述べたが、他に14―12地区では、サヌカイト片、須恵器、土師器、陶磁器などの小片を10数片採集し、14・5．6 古墳付近では、サヌカイト片と共に刃先の折れた石鏃 (図版三・15) を採集した。なお調査対象範囲内に建つ野小屋の土壁より、小玉を1個検出し、範囲外の尾根上では、宝剣塔山古墳付近とやや南の地点でマウンド状地形と須恵器の散布を認めた。

15区　羽曳野市駒ケ谷・飛鳥

鉢伏山の南西麓に位置する15区は、ほぼ全域がブドウ園となっており、飛鳥川が流れる平地部の対岸には、飛鳥・奈良時代の遺物散布地が広がっている。

この地区は、鉢伏山塊の続きにあたる部分と、駒ケ谷古墳群が立地している、独立丘陵状の尾根とにわかれており、前者においては南に張り出す、対象範囲外

以上の4遺跡においては、サヌカイト片分布の稠密度が高いのであるが、これに囲まれた地域においても、サヌカイト片の散布が認められることや、大久保山西斜面の林には、サヌカイトが多く分布するという地元の人の話などから「散布地」とみることが妥当であろう。

また19区においては、中谷遺跡の南域で、須恵器、瓦器を、今池遺跡の北域で須恵器、土師質土器の散布を確認した。なお、飛鳥新池の南100m付近では須恵器が採集されており、調査対象範囲外ではあるが、近鉄上ノ太子駅の北東約100m付近にはサヌカイト片の散布地として知られる、墓の浦遺跡や、第2次予察調査時に、サヌカイト片、中世遺物などを採集した、飛鳥川右岸の上ノ太子遺物散布地などが存在する。

20区　太子町春日（たいしちょうかすが）

20区はブドウ園が全山を覆う標高約180mの春日山南西麓にあたり、南端には飛鳥川が東西方向に流れている。

この地区の周知の遺跡としては、〝ふたがみ〟に載る、春日山南端斜面の柏峯遺跡や、調査範囲外ではあるが、近鉄南大阪線内に、横穴式石室を有する太平塚古墳が所在するが、今回はその他に2ケ所で遺物を採集した。1ケ所（20-3地区）は、大久保山の南約300m付近に位置しており、南北方向に約200mの広がりをもつ。この散布地の北域においては、ほぼ全面にみられるサヌカイト片と共に、須恵器、土師器片を採集し、それとほぼ重複したところで石器を3点採集した。そのうちわけは、①削器（図版三・11)、②両面調製の尖頭器（図版三・13）③縄文時代のものと考えられる石鏃（図版三・14）である。他の1ケ所（20-2地区）は20-3地区と柏峯遺跡との中間付近にあたり、量的に多くはないが、サヌカイト片の散布を確認した。次に春日山南麓の急斜面に立地する柏峯遺跡であるが、ここでは石器と断定できるものは無く、剥片のみを採集した。なお、この遺跡では、昭和50年に、蔵骨器に用いたと思われる須恵器・把手付平瓶を表面採集したこと、またその土器は10世紀に比定されるということを、同志社大学ＯＢの橋本正幸氏から御教示いただいた。

21区　太子町春日

二上山より東に大きく派生する尾根の北西端に21区は位置し、その殆んどはブドウ園、ミカン園である。この21区の南には、紀吉継の瓦塼製墓誌（延暦3年・A.D784銘）が出土したと伝えられる、茶臼山古墳が存在する。（位置については「太子町の古墳」太子町教育委員会刊による、ちなみに「大阪府文化財分布図」では位置が異なっている）

今回の調査では東西に広がる2本の尾根を中心に、3ケ所で遺物を採集した。まず北側の尾根（21-3地区）では、ほぼ全域にわたってまんべんなくサヌカイトの分布をみたが、北西斜面においては特に顕著であった。（図版二・8）また南側に位置する尾根では、北西斜面と南斜面とでは遺物の種類が異り、北西斜面においてはサヌカイト片、南斜面においては6世紀、8世紀に比定される須恵器、土師器と、中近世の陶磁器等の散布を確認した。なお採集したサヌカイト片には石核、剝片等がある。

〔Ⅳ〕まとめ

今回の南河内道路に伴う第3次予察調査の踏査は、過去において実施した二次にわたる調査地とは若干様相を異にしており、西端にはその規模の大きさで1・2を争う応神陵が腰をすえ、他の調査対象地域においても、息つく暇もない程、遺跡は密集している。さて今回の調査では、石川付近を除き、その殆んどが、分布調査の行なわれた地域であるといっても過言ではなく、それら周知の遺跡の再確認調査になるであろうと思われた。

しかし、12月に行なった調査では、大阪府教育委員会が行なったボーリングステッキを用いた調査と少し異り、表面観察のみの調査になったが、須恵器等の散布するマウンド状地形を各所で認め、17区では横口式石槨古墳を新しく確認した。また19～21区では、同志社大学の人たちが幾度となく足を運んでいるにもかかわらず、多数の石器、石材等を採集した。以上のように今回の調査では新たな遺跡や散布地が各所に存在しており、それらは前回の調査と同様に、点のつながりというものではなく、面、言いかえれば、永らく人間が生活したであろう南河内における歴史、風土というものを考えねばならないであろう。

この地域は、前述のように、その土地しか持たない特質というものを熟慮して判断をしなければ、人々の共感を得ることは難しいように思える。

1　1·2区散布地(西より東)

2　5·6·7区　五十村遺跡(西より東)

3　五十村古墳群　6区-2　古墳

4　誉田山古墳群　10区-7　古墳

5　9·10区　誉田山古墳群(北より南)

6　11区-3　古墳

7　14区　真銅氏之墳

8　14区　鉢伏山西峰古墳

1　15区-1古墳付近　石仏

2　駒ケ谷古墳群　15区　サキ山古墳

3　16区-1　古墳(新宮2号墳の可能性あり)

4　17区　新宮3号古墳

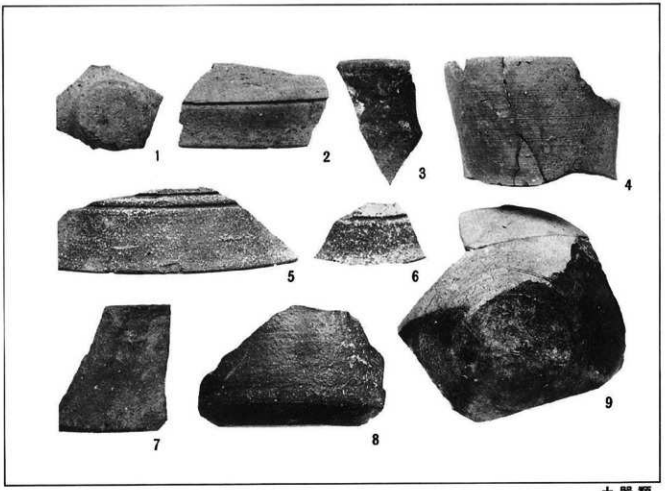
5　17区-5　古墳(横口式)

6　19区　新池・穴ケ谷遺跡(東より西)

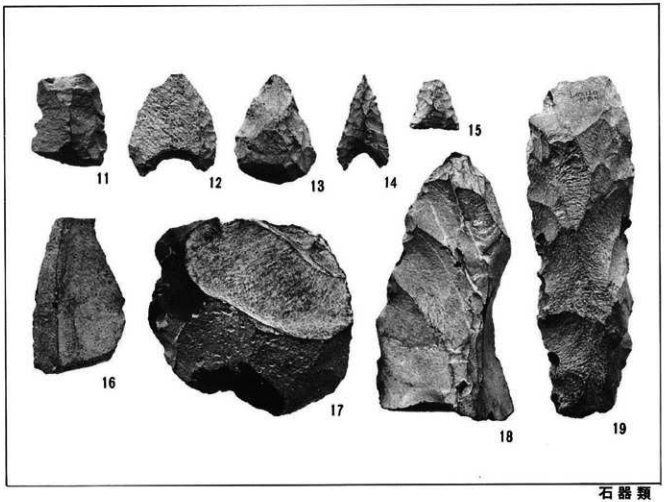
7　19区・中谷遺跡(北より南)

8　21区-3　付近遠景(東より西)

図版三　採集遺物

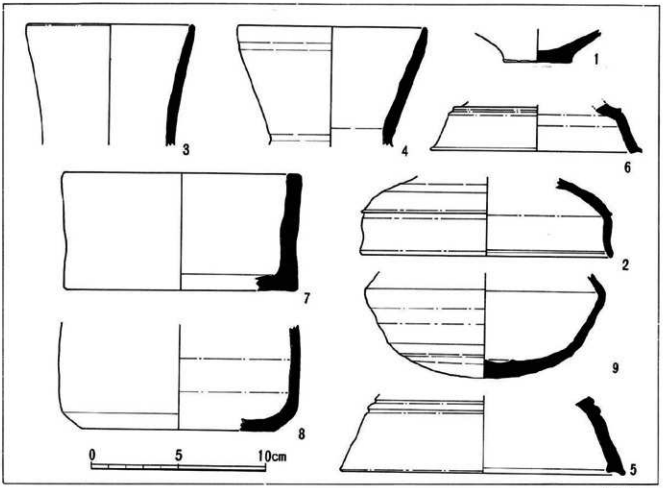


土器類

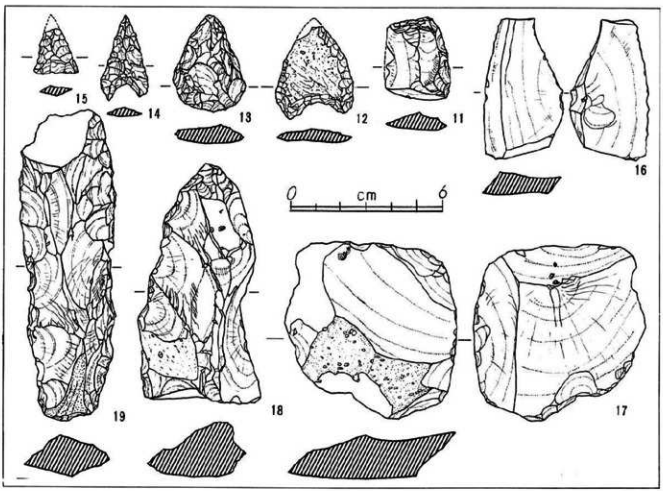


石器類

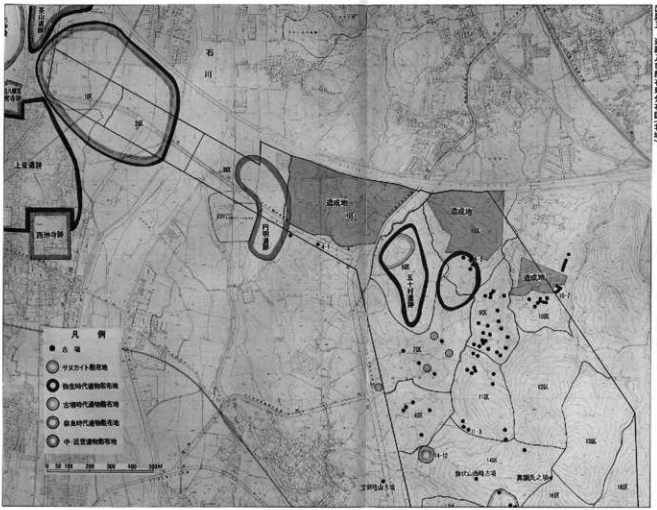
図版四　採集遺物実測図

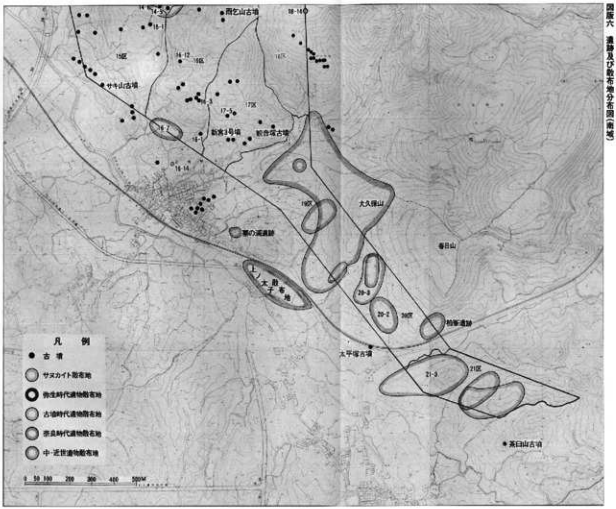


土器類



石器類



図版五　遺跡及び散布地分布図（千塚）

図版六　遺跡及び所在地分布図（南域）